

3 ミス・ジー

ミス・エディス・ジーについての
あるお話をいたしましょう
彼女はクリーブドン・テラスの
83番地に住んでいました

左目はすこし斜視^{やぶにらみ} 5
唇は薄くて 小さくて
肩は狭くて なで肩で
胸は哀れなペチャパイでした

財産といえ^{もちもの}ば 縁飾^{ふち}りのついたベルベットの帽子と
ダークグレイのサージのスーツ 10
彼女はクリーブドン・テラスの
居間兼寝室の小さな部屋に住んでいました

雨の日用に 紫色のレインコートと
緑の傘もありました
お粗末なバックペダル式のブレーキで 15
買物籠つきの自転車もありました

聖アロシヤス教会が
ほど遠くないところにあって
彼女は教会の慈善バザーのために
せっせと編み物をしました 20

ミス・ジーは星明かりの空を見あげて
呟きました 「わたしが年百ポンドで
グリーブドン・テラスに暮らしていることを
気にかけてくれる人などいるかしら」

ある晩 彼女は夢を見ました 25
自分はフランスの女王様で
聖アロシヤス教会の牧師様が
女王陛下に踊りの申し込みをしています

ところが 嵐が宮殿を吹き倒し
今度は 小麦畑を自転車を漕いでいるのです 30
牧師様の顔をした雄牛が
角を低くかまえて襲ってきます

背中に熱い息が迫って
今にも雄牛は追いつきそうです
バックペダル式のブレーキのせいで
自転車は ゆっくりゆっくりとしか進めません 35

夏は樹々を絵のように美しく変えました
冬は樹々を難破船の姿に変えました
首まできっちりボタンをかけた服を着て
彼女は 自転車で夕べの礼拝にゆきました 40

恋人たちのそばを通るとき
彼女は顔を背けました
恋人たちのそばを通るとき
彼らも 彼女を呼び止めません

ミス・ジーは 脇の通路にすわって
オルガンが鳴るのを聴いていました
聖歌隊はとても美しくうたっていました
一日が終わろうとしています 45

ミス・ジーは脇の通路にひざまずき
そうして お祈りしました
「どうか 誘惑しないでください
わたしを正しき女にしてください」 50

コーンウォールの難破船に寄せては返す波のように
昼と夜が 彼女のそばを通り過ぎてゆきました
首まできっちりボタンをかけた服を着て
彼女は自転車で町の医者にゆきました 55

自転車で町の医者に出かけて行って
病院のベルを鳴らして 言いました
「ああ 先生 からだの中が痛みます
ひどく気分が悪いのです」 60

トマス先生はひと通り診察し
それから もっと念入りに診察しました
手洗いの方に歩きながら 言いました
「なぜ もっと早く来なかったのかね」

奥さんが片づけのベルを鳴らそうと待っているのに
トマス先生はいつまでも夕食のテーブルにすわって
パンを小さく丸めています
やがて呟きました 「癌とはおかしなものだ 65

「知ったか振りをする者もいるが
本当は 誰にも原因はわからない
それは 密かに待ち伏せして
襲いかかる暗殺者のようなもの

70

「子供の無い女が罹るし
仕事を辞めた男が罹る
癌とは まるで挫けた生命の火の
最後の捌け口のようなもの」

75

奥さんは 女中を呼んで片づけさせて
「あなた 元気を出して」と言いました
「夕方 ミス・ジーを診たんだよ
もう駄目かも知れない」と 彼は言いました

80

ミス・ジーは 大きい病院に運ばれました
彼女はもはや難破船そのもので
首まできっちりシーツを被って
女性病棟に横たわりました

彼女は手術台に寝かされました
学生たちは にやにや笑い出しました
そして 外科医のローズ氏が
ミス・ジーを真っ二つに切りました

85

ローズ氏は 学生たちにむかって言いました
「諸君 見たまえ
これほどまでに進行した肉腫は
めったに見られない」

90

ミス・ジーは手術台から降ろされて
階下の別の科まで
担架にのせて運ばれました
そこは彼らが 解剖術を学ぶところ

95

彼らは 彼女を天井から吊しました
そうです ミス・ジーを吊り下げたのです
そして 数人のオックスフォードグループ運動員が
入念に 彼女の膝関節を切り離しました

100

(山中光義訳)